



十福為糸抄 上

佛語十論為糸抄

5
6629
1



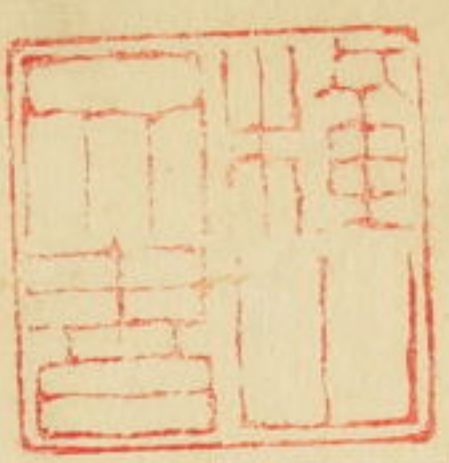
8
318
1-3
n5
6629
1

為辨抄

十論大綱

連二二房

今予の辨おへ連二講途の辨として傳書
一處々の二用とあつし仰抄よ美志の二
とれとくはくはと能浩の信談事話より傳師の
るを説とやつてけく危入るの事をもはくはく
それ争より十論の大意と論語一部と鑿として
世に之れ子の和節とあつし文に之れ子の凡雅と
中と之に靜るもやうくこを意とあつて石と能浩
の論語ともしりはくはくとして十論より對向の詞
の端的らりて和漢より實の意を以て連統と



昭和四年五月
寄贈

5
4318
1

凡後の強柔といふ一は既に我家の仁馬強をも
文章訓といひ教誡訓といふ兩様の家訓ありて
知れ世に凡雅ありといひ教と人此は勸懲
とつらられおとれ柔の和とて好まざる
もつらまて文のよりとのこらあへるも言ふ論議の
一貫おらり先後おのちおまきとありもく西訓は
文教のつ差ふと辨といひ儒書に現在とてこらあへて
付書れ柔の文章とて一は抑強と柔とて
殺盜嫉とすの教誡とつづく畢竟は朝四暮三
の先後あれ一宗と建了時のさ地あれ儒文抑教
此常用とてころ一はれれ文章より一處とてころ
教誡といふ言とてくさる文も中より一は冠とてころ

世上より日の威儀とてころ一は教誡とてころ柔
世に明の因果とてころ一は儒教のさ差ふと
文章にころれ一教誡とてころ道一致ありとてころ
文章と教誡の先後とてころ家の説よりあらりと
はころ一徳徳の者めとてころ一は今此儒論
孔子抑祖通載の金湯篇の補教の備い文章に
いころ異端辨正と論とてころ一は我の
け論のりてころ一は勝負とてころ一は
ころ一は釈迦孔子のさ地とてころ一は聖人の言説
の軸とてころ一は虚実の要とてころ一は儒の
の用とてころ一は眼のさとてころ一は言のさ
思ころ一は抑をの用の用とてころ一は

虚と云ふは、一も二も三も其高過於
 大學^ニを以てんをば孔子も合ふ一も可^レ及其智^ヲ
 不可及^ラ其愚^ニもをば、此の世にの事よはらして
 之を以て言ふは、一も二も三も其高過於の
 虚の虚やと云ふは、有用の事也。此の虚の
 虚の家^ノも二も便^ニといひ、此の虚の虚の
 有用と云ふは、有用の事也。孔子も建^スの事也
 一も道^ノも名利の用あり、畢竟を金銀の所
 あり、事ある可^レ用の用にあらず、愚者も有用
 の用あり、一も二も三も孔子の智愚と云ふは、
 虚の虚の事也。孔子も有用の事也。

説ありと云ふは、孔子もや、儒道の文一と云ふは、孔子の
 一も二も三も天^ノ之未^レ喪^ニ斯^レ文^ヲと云ふは、孔子の
 一も二も三も孔子の一也の言ありと云ふは、孔子の
 教誡と先^ニ一も二も三も道^ヲ而曰^ク文^ヲ亦^レ謙^ニ辞^ト也と云
 道をた極めたり、孔子の文一と云ふは、孔子の
 孔子の虚の事也。孔子の文一と云ふは、孔子の
 孔子の周公といふは、孔子の社稷といふは、孔子の
 孔子の周公といふは、孔子の最期の詞も文王といふは、孔子の
 の心を述べて、孔子の言ありと云ふは、孔子の
 詞と云ふは、孔子の言ありと云ふは、孔子の
 孔子の言ありと云ふは、孔子の言ありと云ふは、孔子の
 孔子の言ありと云ふは、孔子の言ありと云ふは、孔子の

孔子の言あり

うほい孔子之施教也先之以詩書而導之以孝悌
 誥之以仁義と詩書と儒者の根幹なり孝悌
 仁義は徳のほねなり孔子もたれとやうけ
 遠而直之者誥也近而愈明者學也と云ふ
 文章の飾といひ内なる好學の明と云ふ論語と文先
 教後の用と云うに仁義の徳をさるる及ぶと先後おの
 詔と孔子と凡雅の祖をんやせはよく文章の用と
 云ふ世用のすう用と云うにたあさうたはと云ふ
 非と云うに思ふもあやせは本も情と云うに學
 物といふとまことと云ふ尊のさうと云ふを
 象牙の情と云うと云ふとき和漢と文者のほくら信
 下と云ふ海と云う用あれとも教と詩と一理なりと論語

の詩といひ文と云ふ家語の徳文といふと云ふ
 その詩文より虚と云うけつて孔子の身子に對しても
 孔子は百語百變ちらと行る時の詭脈と云ふ
 といふ様でも起ても仁義と云ふ仁義の文と云ふ
 い世に徳病の殿も有るなりと云ふえれと云ふ
 云ふと云ふ附の利と放つと云ふと云ふ病と云ふ
 者といふと云ふ病人と云ふと云ふと云ふと云ふ
 と云ふと云ふと云ふの事と云ふと云ふと云ふと云ふ
 自在のんといふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 時く詩書の文と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 論と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ
 可らんと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

とてしこ殿し不^レ平の二字とわらひしり論語のたす
ハ助語ありてこれ等の文章の優劣と評せら
れんと風雅のは名教といふ返をくわむ
へららし論語は道徳の世風雅をんきとて子游
ハ牛刀の風諭のそまき子路ハ魯の誦詠の
こまき牛のちうこも魯のけりさし文章の風雅
ハ金ありありて論語は伯父の教訓状あるら
るる子思ハ孔子思ハ孔子のけりさし
後ハ孔子のちうこも先ハ風雅の中も徳治のそま
論語一部と鑑とて一才ハ世代の和節とま
ハ知^レ和而和^レ不以^レ礼^レ節^レ之^レ亦^レ不可^レ行^レと一才二
ハ文代の温厲とまらて一即之也温^レ聽^レ其言也

厲^レと一和節と温厲と記諫の培極とて風雅
ハ潜^レ沈^レ肯^レの平懐ありて潜^レ沈^レ肯^レのたの言詠
論^レ侯^レのたの用とまらて今日^レの言詠論侯とまら
ハ一言^レ信^レ人^レ向^レの文飾ありとるると儒^レ子^レの
ハ下^レ言^レ信^レ人^レ向^レの文飾ありとるると儒^レ子^レの
表^レ重^レと表^レとまらて教^レ誡^レの文と表^レとまら
の^レ重^レと重^レとまらて教^レ誡^レの文と表^レとまら
七^レ十^レ二^レ才^レの^レ学^レ者^レも^レ孔子^レの^レ虚^レ空^レと^レま^レら
れ^レ子^レの^レ権^レ重^レと^レま^レら^レる^レ瞻^レ前^レか^レ後^レの^レ語^レと^レま^レら
と^レま^レら^レる^レ類^レ回^レい^レら^レる^レと^レま^レら^レる^レ類^レ回^レい^レら^レる^レ
也^レ虚^レ空^レと^レま^レら^レる^レ虚^レ空^レの^レ二^レ用^レと^レま^レら^レる^レ何^レの^レの
言^レ詠^レの^レ強^レし^レを^レま^レら^レる^レ幾^レ言^レと^レま^レら^レる^レ

孔子のまゝいやは何しものや一もや解堂の稱名
い仰ふの才子あらんけり万代の遺順とて一
一此の虚言とされいせけりも死とてすべし
おは不覺の哀慟とて天喪とてくも後死者
不與於斯文とて斯文の爲あむとて何し
の爲あらんその顔回とて能信而不能及とい虚言
の油とて氣をうけてやせむとい曾子とい孔子
とい孟子も孔子の文とて傳へて教誡の跡傳はる
るあれとも文章の虚と傳へるや對向あり
て虚言とて舞の後井負文のあらん孔子の
言似而非ちる者といつてさうてまくの後者
達しと虚言の傳はるる及んばさういはるる論語の

興廢とておに一繋一虚とて一偏一實と
ちり文教の先後と失つては北宋の二程
といふ一その子ぬ漢魏の比り仰せむいあ
と北宋の世に仰せむいあては禪家の
虚活より例に詭譎の詞とてくらげ儒者の言面
と若くあらん孔子も論語もそとて直理の
脈とてくらげ虚言とてくらげ漢儒詭
皆非也といかりも權変時宜の比とてくら
斤仰老ニ云似是非とも仰氏之言以之楊墨
を互近理學者當如淫声異色以遠之とい
おのちり剛とて例の文章と後て教誡
と先し行むるあらん勸善懲惡心を徳とて

仰書も儒書の是し似る者あり儒るも仰るの
_一 仰一ちうまひ下あり仰る推化といひし推書
といひか三葉一微尖の密附おれ曾安一以の
秘傳あり端木の辨台と目連の非通いはまり
言偃う字文も阿難の說法よりなり須菩提の
戒行も函子塞の法りも論をた偽者もよく
論語の教も標嚴の誠も不明一この誤りあり
て仰れのみいふとさるやうおれは實學すく
と孔子の詞と杜一はさる程子のそと地と仰るに
いふやむとやはさる二程のふよりわく虚妄の用
とちうやまふあはれさるはふもははる
仰る實の一字おれは廉とおる者いふとさる

今も我朝の實あるん中も儒はるこのれ
ありこの子の威儀ありて仰るの誤読もいふ
はあしゆらり文と教とに何と論語を失了
そや畢竟とさる虚妄の是らるいもさる
他者のふらるる家と仰て酔ふくら今の私教
い世代の用とさる四民とそとあい五倫とさるん
はるるおの坊とさる教の真偽とさる
有に今の儒はる實學すよあら入て世代の實と
さるるはるる世に雅の道有達る孔子の虚妄
とさるる有に今の危家い世界とさけるて虚
無一今日のれと失りらるる書物の曠二実を
とさるる孔子の道徳とさるる有るて道の理

一字も論者の作とす一へも教へ維たの同疾
擬ふと我らの字をあらわ論一むの
誹諧の名近とて僧徒青に諷諷の本懐と
あつとてきく極むとのあつとてきくあつと
片敷と辟彼とむとやうく文教の先後と
とけて儒佛のさ地と差あつとて一剛一能諧
の微中ありて年曲と大綱の辨一なる一
まが冬扇 此四子より解る方めあつとて或人の
後即し王充論衡云作無益之能納無補
説猶如以之進が以之退 扇亦徒耳
矮人 老子孫序一矯也憤俗とて一教と
人知あつとて一されとて一されとて一されと

他諸の例の漢美より五偏の諷諷とるにまは
らまはるる在と者あつとて一
梓行沙汰 此段と十論の対面ありけあしけ論の
板行も祖意の減むと十年して一印家の対を
はわらとん減し軽その二代孫も預知様嫌とや
け序し祖意の尊安と信と一他諸の引と三か
しりりて世はのれと美ととある一真意式のはは
い才一説とありは式の新聞とて今とて一
過當 遺稿所説と過當の二字は在るの序あり
きしとて天道の寂然不動とて一天道廢有
仁美とて一たれと大道動とて一人の序あり
れと詞の對の胸とて一とて一物の本廢と一財

あれは上段の的面とせしむるなり儒者の孔子と
せしめりと言語の多とせしむるも喧嘩と平
と失ふも月くみ下下の詞も多やれは言保と
急急のさういなり一節と後詞とてい廢と急
詞といふもさうも勸懲の用ありてこれの文は
人ととらむるも多思の心とに美の端とい
虎家の字格と人ととくはしに美の衝と
直往の言とてしむるは文章のさ地とて
連紙の差ふもぬあんとて此論は言保の詞は
急詞も多家の用あれは後詞もて人の用あり
儒師の二万巻といふも尋常の言保の用
とある一論一節なり

才一段

天道賛 史記滑稽傳 孔子曰六藝之於治一也
礼以節人樂以發和書以道事詩以達意
易以神和春秋以道義太史公贊曰天道
恢々豈不大哉談言微中存可以解紛
秦傳滑稽賛曰善為笑言然合大道楚優孟
賛曰常以談笑諷諫云
談笑諷諫 白馬教誡訓 史記を諷諫の二子
とりて此語の賛とほくそりしむるを君を
いささ父とあこむ友達とやうげむに笑ふて
一面とほくそりて人の徳とあつたゆよせありと

りて廿とちまうてくけいふ人よ遠はるはけいふ人
しあこやまうけつと雇ふ人あそいそく様嫌
とてういへ凡諫といふ綿の中に森のあそく
のそちにいふ人とあそくそくをたれと漸く修学し
ついで我とあそくものくやういあやまうてまう
割膝のす夫見ふりも酒色の中にそ人びとて
あるけいをたれふも馬也一はねれ子の互諫の
諫も属辞比事春秋教也といふ今く今う
諫諫一とて書し知我といひ罪我といふ
勸懲の遠く書とあそく一或は子路とあそく
そく詩之諫書之と講是丘之過也といふ
これあそく一詩を連例といふとて諫諫のあそく

史記評林

十

諫諫のたよりと諫笑あれた諫笑一和節の愛
あつととあそく一愛我も西の人あつ儒仰
し信んしあそく一たれ大悪の人あつ今う不離諸
の諫諫あつとて書いあそくあそくあそく
れま子、互美中も諫諫とあそく世代の一道
と建をたむと七十余国とあそくのく之徳とあそく
もあそくあそくあそくあそくあそくあそく
兵非斯人之徒而誰與とあそく大よ夫のこ地
と子嘆とあそくあそくあそくあそくあそくあそく
一對とあそくあそく一互美諫の解とあそく
滑稽 史記評林崔浩云滑稽昔流涕哭也
轉注吐酒終日不已言出口成章詞不辱身也

史記評林

十

辨云史記上滑稽昔の贊いあむちりにいそんい
虚妄の先後しんりていれい談笑の訛諷し
そそくさくそ凡い世情の和説いあそいそい
諧語滑稽よりそあよ或とい智計性出
或い敏捷の姿に達さそいそ命い司馬遷り
微中解紛の口字より俳諧と遠く太史公い
勘破さそいけい贊詞と近く東蒼坊い況破
とそいれいそ命い

俳諧 史記索隱姚察云滑稽昔獨俳諧へ辨云
俳諧の二字は漢書にもありてかくのこく方ぬ
ちりと古今集にもいそおれい俳諧の二字と
品題とあそいれい別い俳諧の二はありて我家

の俳諧とて各ふのばはちりよやけ頃の式月抄
より俳諧も俳の音ありとやきいありといけぬ
より史記のや文と居くへきをれい人の鹿馬
よりありて漢書の子者よりいへいそい多に言篇
とい人篇の所は十論一部の大口訣とある一
いそ松子庵の遺稿夜話い俳諧の二字と評さ
とい史記の評林の褒貶ありそい夜話の略文
いそいそ滑稽昔傳い九段よりいそ段い司馬遷
本書あり六段と指す孫う附録ありそい命いと
俳諧の訛諷とちちるに或いそい贊とせいれい
評ありい列辰云羽云滑稽昔者全テ鄙藝より直
從い藝に在詔来い此即太史公滑稽昔也い重作

云滑稽也而引之六藝之語文意又不相屬恐有誤也
 有誤之也滑稽等之能諧と云々のものにあり
 面くの鼻柱一掛在き六藝の子ぬとも
 ちるちるやちる六藝之用といふれちる
 天下の通稱一儒術の連能し世にの能と
 射御と書教のて六藝の能云をれん或ん
 事と先うて之れいといふるあり
 或ん事と先うて之れいといふるあり
 あり一と云々万能万能といふて之れと云
 と事智といふ事と云ると事業といふ
 ちる孔子の軍はと舟有にといふのち
 孔子一物取の取あつらひと力御との能も

ありと云らんれお射御も書教も風雅の
 文ありと野也といふ孔子の事といふといふ
 能事と云つるも能といふといふる連能
 ありといふて之れを論能の下学上達といふ
 中品の下に一通と云つて下学上達といふ
 事といふて早きをせはの達といふて六藝
 の下学といふの意用をいふに列能の
 二学といふのれは百倍の太史といふて
 六藝の孔子にたといふやをれつの子と
 批下といふて例は能諧の能といふて
 ありといふて能といふて

遊言語 白馬大綱の能諧の對向あり同日能諧

新編

い言語と家と一て世にとやうくる道あるれ
しや科の一とを一享我子貢と祖といふは對曰
かひしをある言徳の用とるるとはらるる也
下儒師老の家といふ言行の二とををたす
けりて論語を徳けりといふ言徳といふは
いふて力よかといふ言徳といふは人の徳を
言ひ行ふと天地のこ角ありなりとてくま
はてさすや何より我を祖といふは政といふ
の入用とく一文字とく一道の化轉とてたれは
のれ子のとく一男の一人信とてれは徳といふは
はしりの一河難に言といふ言とららち子遊子
貢といふ言とららちこれと傳授といふ儒と

いふ儒書くは仁の一字とを言ひ言徳有仁
之文也歌樂者仁之和也といふはや言徳の
大切りの道に自然の用といふはとおくあ
先ある道といふはいふ言といふ言ははは
言徳の似而非なりす人をいふ言といふは
いふ言といふ言といふ言といふ言といふ
七種の事といふ言といふ言といふ言といふ
言といふ言といふ言といふ言といふ言といふ
あつた物ある一先の子貢の言といふ言といふ
再問といふ言といふ言の言といふ言といふ
言といふ言張曾皙枚皮といふ言といふ言の
言といふ言徳をたぬの言といふ言といふ再對

新編

云々たるも黄白さういあるん論語に扱接連の
こきりに原右ありて辟世人を論じたりと
りや子張曾皙の物りありて吾人のたし
とらありて他語に付とほありて又倫の
まじりに汎諫の法ありて利に向てこれ其の二書
にちちある伊尹吾之任者也五就湯五
就桀もさうありて虚実の言を連て対互
に自在の人ありてや利と對云をたれは羅維叙
のありてさうやのむ徳ありて對とさうありて
さうて智仁勇のこと兼てたれは對ありて
そも吾もありて言語の可く用とさうあり
んまじりたりて儒門の字をたれはさうあり

あまじりたりて人ありてたれは言語にたれ
たりてさうやれりたりておの對向に言語の
優劣自在とさうありて今さう何とさうあり
他語の祖とさうありて新學とせしめたり
燃灯師とさうありて孔子とさうありて周とさう
ありて早もえたりて虚実の言を連て対互
の言語ありて遊の子と師とさう
論語の夫子とこれの夫子と世の人と際
にさうありて言語とさうありて儒門に家語の秘
ありて兵從汎諫とさうありて家語の汎諫もけ
いひやありて汎諫の言語とさうありて山崎老人
の遺訓とさうありて孔子と以雅の祖とさうあり

論語

五

禹湯文武

遺徳入る祿本の竹稿と禹湯文武の
行なりと下は周公とや連なり所なり
他諸の諷諫とちちの之と下は孔子の書人あり
とあるありとついで祖考の孔子ありと孔子の
係あり或は之をけりこれらありは孔子の扱
せしめたるなりけり二句は十論の大綱あるに例の
尚書とてついでつるやはるる辨の後勅
ありは孔子の未詳のあと後君のほとあら
例の遺徳行なりとちなり也

詩易

一貫の孔子論一儒の建立と信
なり下は孔子の異端とせしめたる
の自在なりと稱し是論の大略入る世に用

儒は孔子とて来り推尊の仰ふと信
へ減なり人の説らるる孔子と論語の

此二の論は正とて孔子と権とあり同異

答の虚言自在なる長沮桀溺と車
のて異端とて攻めりともありと曾子有子より

かきけてそのちち孟子の論はのりなり

朱程の末の世とて孔子の推尊のほたあれ

をれと孔子の遺徳ありありと家語と孔
言あり史記と司馬遷の誤あり西方の聖人

老子のよりちち異端と攻めり玉座の專治
ちちのれくちちのれに孔子のなりと一
も他人と世界の人の氣のほたりと論語一部

と称するなり兵列揚軍をいふことなし
よ好するなりありて其と云ふなりて其子と其孫と
その虚と云ふことありて言語の如く
はるる舞入鼓自慢と負さるる飢饉の年の新
毛食ふ所て一方の存と云ふれり下民の難を
圖るもやそれの海濱う天下のありて其と云
きなりと云ふんをれり論語に宰我とせり
井仁の父也と云ふことありて好するの人と
と云ふなり^{ニヤツ}言と云ふことありて其子の
公孫丑と云ふなり知言の自讃と云ふなり
いと子余を云ふなり言評抑の言と云ふなり
維士の達士のの祥はと云ふなりて其の不浄

の如くありて其の例の虚と云ふことあり
其の如く異端と云ふことありて其の軍法の
謀と云ふことありて其の合点と云ふことあり
の如く云ふことありて其の言と云ふことあり
その如く云ふことありて其の論語と云ふことあり
それと云ふことありて其の言と云ふことあり
その如く論語と云ふことありて其の言と云ふことあり
其の如く云ふことありて其の言と云ふことあり
我々の如く云ふことありて其の言と云ふことあり
の如く云ふことありて其の言と云ふことあり
て酒盛の指子に其をいふことありて其の言と云ふことあり
其の如く云ふことありて其の言と云ふことあり

猿田彦

神代卷

猿田彦 神代卷 先驅者還白有一神居天
 八達之衢 且其鼻長七咫 北日長七尋 眼如
 八咫鏡而赫然 似赤酸將西云 按云 以天津
 兒陸狼 臣天鈿女等之皇孫の供として
 猿田彦の功のいふこといひ 鈿女は情のいふこと
 つる 尋竟に物ともいひ 強にわたりし 此語の家
 の訓諫をいふ 多し 凡雅の仙傳と云れり 此
 辨ハ才二論の神農黃帝の下に之を見たり
 凡雅 仙傳 齊部宿禰廣成古語拾遺 天照
 太神赫怒 入于天石 石屈八十万 神成石屈
 前 是年庭燎 巧作 仙傳 相與 歌舞 云 按
 此の凡傳の二子に漢書にも 仙傳雜戲也

ことり 云れり 宗廟の太神も 仙傳の決り
 同也 云れり 大和の凡雅と云れり 齊部
 詞と云れり 仙傳と神樂のいふこと
 ことり 仙傳のいふこと 凡雅と和芝の才一
 云 仙傳のいふこと 凡雅と和芝の才一
 仙傳の帝と祀いなり 仙傳のいふこと
 ことり 仙傳のいふこと 仙傳のいふこと
 の帝に戯れなり 仙傳のいふこと
 仙のあさくら人ともいふ 仙傳のいふこと
 仙傳のいふこと 仙傳のいふこと

新撰

以後章の虚字とつる文章の起結と辨せし
法式新四梅よりつけ一段を言の論と人の論と
あつて新四の表れとこけりては式の差ふり口傳
ありとらなく皮裏の陽秋のやいししあひ
今の十論の世の機嫌とこころの例と即縁の時
あふの負字式と撰とてまゐるやこれの辨
の二大よりして聴者無妄則道不入とあ
のり系語と伯常の辨を片の式の新四
へこゝに実をててせ

檀林額 江戸八百韻に云ふとて檀林の本
何り梅の花とて宗因の老句より檀林の老い
世はゆくとや或を筆蹟はしむいとて

ぬこ今より或は花とぬむとてさうらう
善のあつてふおやははれん自他より宗因の
比やとて所ををををて梅とをさうらう
全く連きにかりぬへ句とて誹言の論あり
梅と宗因と老句も所句も皆く詞の根子
のこりて喜よそあまらるあはれと物に
とも檀林を新ともいふも對し風物のとまよ
あはれとて風とてさうらうとて祖の遺訓
ふん今より五十年の昔とやうらう能楽の上
も人しとて梅の子細と當對は風の歌に
連しといふとて子もとて孫も歸れをまよ言
語の理處とあつてとて下文章の昔に

新撰

新撰

論さるべきの世の小事淨白のときと相照のほの
誠とありまじりまに石根の持論とある
とせよとせよと世の授託してれよと地の既而非
ちりともは深くあてしむる

唐虞先 此の子と父の子對と辨と一に言に
そるのそととていつて義農のそととて一と
そととてそととて極中極とぬくそとて唐虞
の國とて齊楚と對とて例の意とゆり
とも次とてそととていつて文章のそととて信
ふと十編の文化考終るまをそとて例とて
誹謗 不知 辨とて此二句とて傳の西文とて
まゝ論者と書けとて二句のまゝとて

一にてもくハ重 眞後 一に公任も押信とはは解
のそめあつたそとて法式とてそととてそと
右人とのそととてそととてそととてそとと
はととて言篇の誹諧とてそととて論とてそと
人言の誹諧とて史記とて姚案とてそととて
て凡解とて式とてそととてそととて例と過
當のそととてたそととてそととてそとと
と誹林とて諧語滑稽とてそととてそとと
自在とてそととて洛の双林寺に假名の碑銘
ありとてそととて七字の謎文あり謎の解方
と内陣の秘軸とてそととて但石碑とて謎文のそ
と漢家の記とてそととてそとと

つらりしやを我々の之道とすべし儒佛并のた
てをわくの理備ふるをうとて辨るべきもの
非ははるる神とて感仰應答のふりて天文
地理の妙用ありのまゝにせし教一とおそれ
あれておぼるむとていそ人ととむ一秘一
つらりと天下の顯名とす一兩都とて信家
の沙汰しして談笑の場の賣詞ふれ例の異端
と致るに及びしとて誠や十論、儒佛の三用
らるる遠く老教の方外とあり近く非なるの
現れとありしやを賢のまじりてい言詰
自在の場とてしるべし

故實 伊波上古代とて吾賢の提といふ例に

國家の效といふ故實といふ例といふこと
といふこと今の子に解やとてをさしといふ老嚴持
の玉瑠璃の味の子に疑ふをれとて巻末に記し
本とてをさしとて吾人の錯とありしとて錯
といふことあり

伊賀素生 白馬持の負外と才子伊とて不地
之所東巻坊の附録ありし伊の大略とてあり
伊賀の城とて吾をさしとて推るる金作と
といふこと伊賀とて四姓ありとて地者軍の中此松尾
氏ありとて伊賀とて一の謙諧のふりて宗正とてい
落姫のなつ松姓のいさしとて松青とていさし
へ梅子不熟のいさしとてやとて宗正とていさし

伊賀素生

世三

さうのりいあん十九の年に信とあらせられた洛陽
一季のつと仰り武陵王其南亮書を以て人
ととり信川のまじき庵と居道ありて二十
の年ありてせけ許し埋木の下に書け難けの
遺抄に配方あり才二般の老後の下に人
天章一道理 じうより儒仰の大道も新その過
の七仰と仰り孔子の現在し七人の仰あり過
へともくに居たの企あん況や孔子の居た
うへに居たに周ふときいひのりて居たは然
の他受用よりも百世に王道の大からく
はれり一道の祖とちりく智はのりて居る
とあり燃灯仰の授記ありといひて稽よる意

比まるとるをも信とて家くの仲人ありけ
今の他諸もそるるを極の是より仰りて
い史記と仰りて言偏と人偏といふの
仰の式と仰らるる強の一字と十論と勤
凡雅無私 得るに結語の信の一字と
めらり十論と可なり古人とてして
と述むといひありて儒仰の仰記と
好悪の例の互ひてけありて自室の二
古凡しよるるの仰文と仰るる新仰の差
ふのと信とてつる信の一字の大驛り
貞字式の用とて室とて一とありて道
ありて辨者の眼と看へる也

こゝろをよとある一減一増の好悪をこゝに足のかゝり
ふれいそと二物の証より一傳仲も説くもの言
と我とわれ傳はるるの表とてや傳教も虚
の業とていふもさるも二虚の業をさるる實にて
一も實の業いさるる虚ちりともや虚あるるなりと實
とせしとれいさるるなりと虚とらるるなりとを
習書の傳よりてとちりも一時の入り用せはれども
いつの時の虚實とて言虚とていふはまゝの言詔
の次第よりてせれと撃石火とも閃電をとも
向ふ不交只髪友ともいふなりと子者の心は
万子の表と師匠といひて才子の千重の二程
とあらはれれと自悟とも自説ともいふべきこと

報ゆれ子と傍向ともいふ言詔の重々をかへ
のりぬれとと二道建立の大よまといふちりも
先後の二子に我家の常後よりておの好悪と
いひ証よりるなり

之條法

白馬、常道訓、論語の和節と細りて
之條の法にはありし訓の畧文に別して世の
和とて能信とて教子兄弟とていひて老る
高才早とていひてその時の言詔ありと
削の虚實に自在なれども次にいふこと
史記の諺とて家法として言詔の用不用と
いふこと次にいひていふこと同類を隠すの
いふこといひていふこと茶人のいふこと

みづから

て世はよふ日のあつた用にあたり十論一部をけしに
 出づけしと建立の行むとてふ一
 世情 世情 世情とあるとてふ一儒師一様の民
 おうくまると親疎の語うて師の家の空相と
 ちるのちるはらるる又備とをうてせしめられ
 せしめ他人とも一屈とをうてせしめ師の親疎
 とそとふはらるる人の機嫌とてはらるる
 やらぬるもつらぬ管もはらるる一儒師の言葉
 も自他の交の二たういれ記し和の二字を
 きやまると世人の眼力と相似のは此誠と
 つらふありて諷諫と諷諫とわかれ辨説
 ふれはらるる場の危き下とてふ一世情の世情とてふ

時と詩のつちり序をなむとて

俳諧 古人 俳詞を草の松とて不付おしはるる
 い奥羽より舟の集ふれん也 遺行 夜話 我々の
 奥羽より舟の集ふれん也 遺行 夜話 我々の
 加存のつらむるに世界よりあつたやうな道も
 大極の一氣とらるる皇一はかりてみちへ行へぬ
 の世に世に人といふとてはらるる一問を孔子
 と道の本欲とてはらるる世に世に人といふと
 工高の難いとあつたやうな一問を孔子といふ
 祖といふやうな一問を孔子といふとてはらるる
 ちるとての俳諧といふとてはらるる史記といふ
 をたしむるの言はるる古人といふとてはらるる

みづから

みづから

世詞の過當よりして世内の家道もけぐる一たれ
いひゆると我行よままの人ありて世詞と百世に
傳へんきこむに家訓の密語あるを世にけらく
故年の歎息とあはれ孔子より家持の釣糸あれ
べしやうとて世事より世詞とせりて湖海より世に
よけらるるも世時の世世よりあつたきまの節
ちり其角も例のあつてくも他人の句作のめあふ
も自己の世詞の暗ふんよと世詞の世法とあつて
すこしはるるも言法の業とよむる所家の世法
まこと地あるをよとせしも難世の遺世とあつた
我ひより世法の罪人とありて古今の家道と世と
くも世の人の世法とあつてくも世の遺世の報恩

みねたし

世

あつてくも世の世法とあつてくも世の遺世とあつた
世詞之詩歌 按るるにけし五字はけしと十論の
存めしとて一むしりけるも連能とて四世
四世とせしとて詩より世法あれと世法の
洒落ありて世詞之連能も連能之世詞も
よふまことやちり世法仰も連能ありて世法
よふ世法者禪者といひ世法より世法とあつた
世法と論語より世法とて具智可及具思可
可及も過猶知也及も孔子より下子の用あり
法と頓漸のあつていひ世法とて世法の世法
古今世法とて世法とて世法とて世法とて
世詞の所ちりてくも世法とて世法とて世法とて

みねたし

世

西行集上

の事詠ちりとりて無詠之詠なりとて
 誠と宗祇宗長より兼載紹巴の連なりとて
 も耳におおしにけりて尼も入るも可なり
 へ例の事詠りて無詠をたへしとて耳にけり
 二重の意とてさへしとて思非もたの意も
 中へぬると洞もさへしとて今之詠詠
 まる事ぬるとと柄とをたけ比の風言より
 されんやうとのきくもや耻へるもの
 を中りて婿とて人の面はらりや
 の不遠波 助辞要序云助字者詞意後而可
 知物之差別とやとれん言詠り音韻の二り
 憎愛もその年もあるとれん急後音のあり

して雅俗へ韻のみまこととて今按さるに
 西りの号に山人花さるやとてさるもの
 いささか平らとてさるけりけり今之詠詠
 あんたにさるやの雅言とけりて人ある
 この号とたへるこれと俗中の雅とけり
 下西行一代一首の撰おといふもさる
 詞とたへるやとて詠詠新ある富士の号は
 凡とあひくもありの作さるやとて社子
 へ懸字と妙とわたり春水鏡深も野航恬受
 とて縹浸堤柳とて縹捲浪蒼とて星低
 とて月浦とてこれの物詠へ句とてに
 ありて語不驚人死不休とてさる凡雅の

西行集上

世

精神と云ふは、一と云ふは、詩の、助詔の優
一とて、感仰と云ふは、人の哀然と云ふ一誠
二老と、虚妄の自在より、例の、例の、
くある時、机と云ふは、一あるお、
ひ、一と云ふは、一それと、
哀然と、
名入場、遺稿、後話、一西りの、
可、一と、
あ、一の、
い、一の、
や、一と、
お、一と、

と、一と、
十、一と、
先、一と、
子、一と、
也、一と、
何、一と、
一、一と、
如、一と、
今、一と、
吾、一と、
人、一と、
以、一と、
共、一と、

○
子謂子貢曰女與回也孰愈對曰賜也
何敢望回也回也聞一以知十賜也
聞一以知二子曰弗如也吾與女弗
如也
今按此章者、徴子貢之方人之惡、
吾、不、及、向、不、察、夫、子、之、虚、實、
人、之、向、而、可、知、不、暇、之、對、也、
以、與、字、令、註、許、可、之、義、止、乎、
共、也、或、説、不、者、點、吾、與、女、弗、
如、而、所、謂、

子貢論上

子貢^ラ詞也^{ナリ}了^ル其^レ在^ル者^ハ温^ニ而^テ勸^ム善^ト也^{ナリ}則^チ其^レ言^ハ字^{ナリ}
 我^レ子^貢時^ハ者^ハ厲^ニ而^テ懲^ム惡^ト也^{ナリ}子^貢論^語者^ハ知^ル世^ノ等^ノ
 之^レ機^ヲ變^シ而^テ知^ル其^レ時^ノ之^レ七^ニ十^ニ弟^子則^チ可^ク知^ル其^レ
 日^ノ之^レ孔^子自^ラ申^ス矣^{ナリ}然^レ其^レ聞^ク而^テ所^ク知^ル者^ハ上^ノ智^者聞^ク
 而^テ知^ル二^ノ了^ル則^チ十^モ麼^モ可^ク知^ル万^モ麼^モ可^ク知^ル從^テ本^ノ万^ノ法^ノ之^レ
 理^也則^チ也^{ナリ}下^ノ愚^者聞^ク一^ニ而^テ知^ル一^ノ了^ル則^チ自^ラ身^ノ者^ハ里^ノ東^ノ
 路^ノ者^ハ自^ラ止^シ争^ム知^ル時^ノ宜^ニ之^レ變^シ矣^{ナリ}爾^者有^ル則^チ論^語
 之^レ二^ノ與^テ干^ス者^ハ將^シ直^ニ子^貢之^レ方^ノ人^ノ之^レ癖^ヲ逆^シ知^ル智^惠
 立^テ八^ノ段^ノ之^レ違^ハ而^テ令^シ威^ニ子^貢止^ム者^ハ必^ズ定^ス也^{ナリ}
 儒^者内^ノ證^ヲ按^テも^リい^ハけ^ル章^ノと^シ論^ノ論^者の^レ辞^美
 多^クん^はら^るる^の奥^ノ廢^トと^シふ^に釈^如來^の道^と
 阿^羅離^とさ^らり^孔夫^子の^レん^と子^貢と^シひ^らり^{たり}

唐^も天^竺も^も代^ノか^らむ^けの^レ我^おも^をれ^と傳^へ
 て^テ吾^レは^也子^ノの^レ仲^は王^代より^り非^をる^をい^ひ傳^へ
 と^しふ^は然^上人^の會^仲あり^と任^違あり^とひ^ら
 かり^て任^違あり^とに^とる^れん^とを^めち^ら
 親^意も^日蓮^と道^とと^し師^の信^とお^ない^けと
 その^レ身^子此^とい^ひり^{かり}て^レ隱^之の^レ道^と本^ノ庵^と
 とい^ひゆ^り阿^羅離^とと^し好^色の^レ浮^んぶ
 あり^と本^ノ庵^とと^し紙^子と^しお^重の^レ法^{あり}り^と
 富^貴の^レん^とり^り王^侯の^レ家^{あり}と^し茶^の
 湯^{あり}と^し酒^盛の^レゆ^{あり}と^し和^とと^し代^{とい}ひ^れ
 へ^から^りと^し一^時の^レ拘^{あり}と^し一^二の^レ
 建^えと^し他^ノノ^レ敵^とと^し我^ノと^から^ぬ火^羅

子貢論上

社

水災の憂ある者ありた詔しも才子と師の
中法と減とてしる。拙と天守の次第あり
とるる。一今も冥存とて商の性面也
頓漸 四教後、頓漸秘密不定の口はと師
の上此次第ありとて、佛書とて温厲の二は
一、重と師とて、法とて、ありんば、善
薩とて、佛とて、やううとて、名徳の凡まし
やとて、あし、え品のせつめとて、おさ
の刊者の下に互見とて、

蒼冥自在 原説、蒼冥とて、虚冥也、
の障あり、教誡とて、虚冥とて、
とらふたれとて、論とて、
とて、

いひこゝあつふと蒼冥といひ、
いふ人もあつふとて、
の辨より、
人磨とて、
は、
の者、
とて、

我身功 獅子庵の遺稿、
の中に、
賛とて、
稲妻とて、
は、
僧、

記の月北何れもとりて早かてん 東老坊
按るにけしきとと老のやれとふさるあさん
減し祖のやれと國中の例の習法とに
の處の人と看破されへ閃電の垂るもねと
なりこれに温厲の二おともる一お竹と
なり世依のる心よりはあといふもあとい
能讀も人の好悪かかきもやとさくも日と
とりはく東老坊と所命とされと難陀の
遺状といなりて古今の誹諧めんと説破りて
天下の右派と坐断とむし道と建立の常
けられもさるけ國と識文よりて定に祖の
の陰法とされし也

佛頂和尚 け和尚の在りて天和貞亨の比あり
播磨の盤珪禪師といはるは所頂和尚と
し天下の龍虎の名を識ありしは凡雅と
稱のりしは武城の深川と禪刹ありて
芭蕉庵とされしにちり

先後樂 遺稿の五秘と難陀の遺状と通あり
へ聖徳ニ牧あり横折一牧の遺物の覚あり
はると減はる十年とたはるは深く秘し
されりうらと老のあしりる金言のやれ
るよ祖の叮嚀あり具言也善うんと遺言
の教と傳りて百世の記念と孫とりの也

わすれ

三

松尾下りの水しり字未死なると雖も此れは
ちりあふくお果の味も中々中々非
水尻新の味をなるとよ
溜子下りの水しり字未死なると雖も此れは
お果の味も中々中々非
不さちりあふくお果の味も中々中々非
すく水尻新の味をなるとよ
貴重と知るとく人方を此の味とす
なれのお果の味も中々中々非
へ山の方いふお果の味も中々中々非

元禄七年十月日

いふ判

仔云出下り南ふち妻自身身損し昔お
こいの上りこれなり中々中々非
好丹を茶も此の味も中々中々非
神の味も中々中々非
表障へ下り不さちりあふくお果の味も中々中々非
てり力流し松尾子冊八葉あり
るおの味も中々中々非

元禄七年十月日

支考はなす。佛經の親切なるを
おの味も中々中々非

いふ判

遺物覚

この日記

何年か

存向書

何年か

埋本

何年か

新式書入

この日記へて書し何年か

字入し何年か

支考し何年か

文章及故事

この日記へて書し何年か

くすの稿と云ふ

既換し

一 此冊中何年か

炭俵集何年か

稿と云ふ何年か

日記何年か

一 猿蓑何年か

一 古今一存何年か

秘南何年か

この支考し何年か

之稿七章十月日

と云ふ

右に湖南の本曾寺よりとりおのせしと云ふて
 膳下の曲裏書きにけれといふくに此書も持折も保
 の吉果代子よりて支考へて心解の二解と云ふ刊と
 祖系の自子ありと説よけを伝へておなの
 後の子おちてやれといふと一々の字の五かきい
 令後の期もちかかんと云ふ字もあつて保勝
 あれといふのく洞と云ふりきりて我師の
 任おのせしと云ふ遺物と云ふ一と云ふ也
 物始終 梅もいれおの始終と云ふと人間の活年
 あり遠きと一と云ふ一と云ふあり近きと一月一日
 ありやして一念の間し利那の始終あね士
 農工高のふよと云ふて我れ何と云ふと始めて

何よりと終ちりたりと親りも是るも向ふらばなま
凡よりある我と定悟を一とされと孔子も自ら
とて自己とされとの教もあらねけし故にを
の詠美らと固其名双六の遊にあらんてのま
詠詠とあらんて我とをいふ事よりして詠詠と
くやむともそのあふとあらん人あらんこれらに
をねの用とあらん遠林の親切と感と一
人間遊所 梅もりに此詠と例の如し挫いて古風
を人の所居とほしくあせきといふ論詠は富而
可求也雖執鞭之士吾亦爲之如不可求徒
吾所好とあらん吾と詠と諱諱の人と見て是時
の措詞ありとやく言詠の表裏とあらん一

孔子の吾好^{吾好}遊つとて言のやもまに人間の如
とつらもあらん今にけし詠と利とされたるを
けし詠と言とあらん詠詠のま地へあらん端の
字もあらん油ひとあらん

傳曰

神曲原黃帝 梅もりにけし一對はふも猿田鈿女の
子格あらん次格のけしとあらん也非曲原と例の
木もあらんともて百竹とあらんも源もあらん
黃帝とて常の衣冠とあらんて殿もあらん論
ももあらんといふとて圖とて慶賀の神文といふ
六義 六美と詩經の詠ありて凡を軍内の護とい
雅と朝廷の詠といふ頌と君王の詠といふ雅頌と

の詠あり

六

六 變とあり賦比興と律とあるは種の異なる法抄
一のめもさうりに我家の言葉とすなり凡そ一塵也雅
くも也頌と万物の讃あり一文の塵も其を詠の
はね也賦と眼ぶの姿其とせられ比を律とす
是より一塵とえその一律と興とすも其の喩の有無
ありて自己の獅の差るとさる一とせや心と自集の
略文より詩家より一塵のほはあられ凡所の二字
とい律とすこと也

没滋味 梅もるにけ同答と全く理するの叙ありて
上よりさるなりてその理とありて下よりありて
もつにせしめたり。才七修り世のあはれも言
一能諧の詠とすこと也けや須たはありその帆

ひりあつてよる白にけり中み標の本枝とけり
けりて大おのれとけりてよる白と針とけり
とりの理とけりてさる作をとりて一とさるに
投子と辞とけりて茶碗の中一世界ありと
人とさる言詠の事ちりん今のは本頭とて其の
負ておけりく人の厚言とあやうされきん
たれとす味の力味とて禪家の人のあはれ同也
其中刀 梅もるにけりて禪録の常法ありて
さるもとあつて抑揚ありたれと儒のよる時
い或と和中の節とけり或と温中の屬といふ
言中の評もさる言とてさる言とて言詠の
表裏とさる言

此書あり

此二

才之段

白馬の徳 接するに白馬のこ徳といひ智に勇か三者
天下之達徳也云々孔子の詞よりつてたれといは
のりやと云ふもつれなりと世論に再行して智
の敏捷の事といひてはと誤笑の和といひて勇の
頭挫の言としてつれなりと勇の一歩の事といひて
論語に引ける論ありに者能好人能悪といひ者
必^し有^る言^は力^は勇^は有^る事^は必^ず然^らざる事^は能^く好^む能^く悪^む
この能^く好^む能^く悪^むといひて勇あるに能い能^く好^む能^く悪^むといひて
之れと云ふなりとにとかねさく論を引よる是後の論より
之れと云ふなりと智あるに引よるこれ父子と子路

武勇といふ一はつれなりと好学の三子と説のせんがう
文道と智の三子なりと云うなりと論語のたより表はゆる
し王道と論するなりと云うなりと唐虞の文章と云うなりと夏殷
周の徳と云うなりと宣のたに周の至徳と云うなりと文王のたに
武王の武といふなりと云うなりと武王者乱臣
十人とも才難と云うなりと云うなりと世くの説を述べる
乱臣のつ子と云うなりと云うなりと云うなりと云うなりと
乱はるるなりと云うなりと云うなりと云うなりと云うなりと
いふなりと奸賊といふなりと意なりと云うなりと白馬の或向
うに敏捷の智と猿の朝にといふなりと勇の三子難陳
ありと難と云うなりと論するなりと云うなりと云うなりと
何なりと頭挫の言としてつれなりと云うなりと陳に云論語に子なる

白馬の徳

子路

琴瑟とすまや君子有り之妻聖王之儼然即之
也温聴其言也厲之也師道之也
勸懲の二おのはねあはれ君子花のおさるれ
おさる一とと教化の詞の表裏あはれ

詩歌連言 白馬文章訓はけり連言の以と
あけり位階の論あり以雅と詩はけり
やうまて連言とされ枝葉とけり
とらるる連言といはれ一とやけり連言
の文より一と連言と武ちねえとねえ天の次才
けりおと君臣の位といやけり文と武ありと
とい武と文ありとけり一と後とけり天
とらる一とと連言と訓練と家とてけり

天下の治見あはれ一と連言の虚
あてて武威と文事とけり一と連言の
とあはれ一と連言とあはれ一とあはれ
とけり一と連言のわらり一と君臣の位あはれ
連言とけり一と文事の位あり一と文事の位あり
とあはれ一と武細公平と對して一と強弱の
強弱の三用より文武の位見とけり一と論
も不謀の位とい一と連言とけり一と
一と詩言と儒術とけり一と道と
一貫のる一ととあはれ一と分とあはれ一と
一と一と一と

言語 先後ありけり一とあり一と和の大略と辨

白馬文章訓

九

一、時宜の自在と審察と一、誠と言語の六中から
出ると此影回しやうといひて小人之言同率君子
を不可言察とありき一、七言詠いせらるる人の
むらゝくといへる人の言とちうといへる人の言
道文章 白鳥文章訓入るる文章子の用といふ
へい衣冠いせらるるあれらるる類は羽毛のあやゆり
雅俗もさる早もちういせらるる一、水母の腹は
はれや海中とありといふありといふ一、いふ文と
りて人いせらるるといふといふ一、いふ文と
とれ子も子言といふ一、言い足志文は足言
不言誰知其志言之無入行之不遠といふ
とらゝい道といふといふ文のえらるる一、とある一

いふと道の文章子にれ子ら幾言といふ一、い
助衆といくといふ此意とぬといふ在より富言と
而いといふ物の形容一、過當ありといふ一、新起
の七子本意といふ幾言もあり富言といふ一、信語
もあれは雅言もあれ一、一字一、言い文子といふ
らといふ一、物言と讀はくといふ一、言に正子の言も
あく一、亂言の字もふれい入るるも讀
あらといふ一、和玉と篇といふといふ一、いと秘密
の二はといふ一、阿提羅波提羅叫といふい巨痛
といふ一、化物といふといふ一、いせ金といふ
持といふ一、唱といふ言の功徳あるといふ七子といふ
のるにありといふ一、いといふ一、いといふ一、軍は

阿提羅波

軍は

二道とさういふものあるか
の文とて今この用とさういふ
万巻ありといふもの通にさ
子細ありとるに今の字を達
畫十五畫の字とあつて人の
とあつて又さういふもの何
俗語の手話あり又さういふ
一と訓とさういふの通にさ

滑稽諷刺 持するに儒書も
諷する人あれども秋野と何
何れもかくと一のあつて同
あつて一のあつて人の用と

あつて古語と持するといふ
と文字を穿鑿するといふ
味とてあつて我好の書人
とて一我胸の法をと海と又
不慮して身とて應變のふ
も射のおもにさういふ
お場とてさういふ例と檀
優美の凡そのおもいふ
のさういふかこいふとい
すてさういふ中のおもい
る薩摩の諫も不慮とて自
胡亥の可分別とさういふ

乃海江

卷二

ある一と云やけくも用の神文より史記の別傳より
齊田常欲伐魯曰魯父母之國二子何
為莫中出子路子張子石請行孔子弗許子貢
請行孔子許之中畧故子貢一出存魯
破吳疆晉而霸越十年之中五國各有君長也
と云けし時の軍と云ふに孔子のけりてありけり
けし父母の國と云ふに孔子のけりてありけり
つるに孔子のけりてありけりてありけり
るに孔子のけりてありけりてありけり
けりてありけりてありけりてありけり
も功と云けしけりてありけりてありけり
存魯云々の始願強魯弊吳使越霸者賜之

詭言傷信慎言哉と云けりし教誡のけり
けりてありけりてありけりてありけり
訓し屈節の二子ありて所請お徳の秘訣と
あるにけりてありけりてありけりてありけり
の要とおけりてありけりてありけりてありけり
と云けりてありけりてありけりてありけり
孔子のけりてありけりてありけりてありけり
と云けりてありけりてありけりてありけり
と云けりてありけりてありけりてありけり
の文章にけりてありけりてありけりてありけり
と云けりてありけりてありけりてありけり
才と云けりてありけりてありけりてありけり

史記

卷之

唐虞舜禹を以ては天子の徳を以てして萬民を治むる
之種の用のしや況や宋の治道とては政の
文學のしは遠くして言はれ今今の用のしや
とては宋の治道とては戰國の中にして
ことごとく時代を過る月利ありては
政のしは文學のしは言はれはことごとく
とては夫の使令しては智に勇とがわら
ありては宋の治道とては治道とては
とては干戈とては治道とては治道とては
今や治道の五科とては治道とては文學のしは
文學の政のしは治道とては治道とては
干戈の人とては治道とては治道とては

漢書

四百

あつて張蘇の智勇とては孫吳と干戈も
治道とては我言る言はれは孔子も
に治道とては孔子も治道とては孔子も
とては治道とては治道とては治道とては
文とては治道とては治道とては治道とては
ありては治道とては治道とては治道とては
とては治道とては治道とては治道とては
非也とては治道とては治道とては治道とては
今とては治道とては治道とては治道とては
子言る治道とては治道とては治道とては
不根の持論とては治道とては治道とては
目の治道とては治道とては治道とては

漢書

四百

ある一はれと危行言孫とてその所の歴々とて
あつたてし時して不字適とて知る政適より
たれと過とていふも死をいふてあつたて
ぬとて一書無記の人とていふ所の記
ありその所の孔子も言説の過ありて陳司敗とていふ
とて丘也幸とていふもいふていふ所の記
徳行とて仲牛仲とていふも丹有季路とていふ
外子もその書物の中に子辭とていふも子曾を
すつたて言説とて木遣の抱子とていふも子也
とていふもいふもいふもいふもいふもいふも
も言説も名のきもいふもいふもいふもいふも
たれと連卷の人とていふもいふもいふもいふも

漢書

卷之六

たれと危行とていふ人と古語も猿も鳥も
いふもいふの机の上に文字二遍のきとていふも
とていふもいふもいふもいふもいふもいふも
連記も一以貫とていふも一以貫の書とていふも
史記もその弟子傳も論語も七十子の勸懲も
子貢の辯論も張侯の蘇秦も説客も評林も
我徒の樹木もいふもいふもいふもいふもいふも
いふもいふもいふもいふもいふもいふも

宋玉文章 白馬文章訓も今もいふ所の文
宋玉の招雲のときもいふもいふもいふも
詞とていふもいふもいふもいふもいふも
あつたていふもいふもいふもいふもいふも

漢書

卷之六

とついかう古今の賢者と詠破と一々早見の漢文
の詠諫よりして屋宇のやまのまこと其文章の法格を
七段の評しるるなり

文章感仰 接するに感仰と文章の全篇の哀愁を
そとに 艶書の子束の思ふふ字のわいありて
あふく 百枚かきやるとも人の心は動かさず
と浅く 密にまきめいし井のよもにさるる人
人とあゆむ間のあやありはあやもあやも何の用
ちりやまにすく用の用とあまるとも一けま
才九段の可然此二子のほとありて一町うまの
哀愁と一田村の鬼神の感仰と辨す
我家密法 白馬、教誡訓は二句の要論あり

致とある時と人として一を儒術法のおんね
うて我とある時と人としてあまふの詠諫
の家のさじ地とある一むりりるのおんね
あふくを儒術とて溫和と善とまこと一用
一道あねらむりひ道あねらむるとい
ゆると端的に悪とあらうてすく家の密けい
まふかうと一と一けふ端的の溫和と一と一
溫和の端的ありきと一親疎の調はういふ
これに言詔の表裏とまふく儒術と一と一
あつくとまふくは詠諫のそとと一と一
人の詠諫とかけと一と一詠諫の代とあふく
あふくあらむと一と一詠諫の代とあふく

あつてさういふ應聘七十國而屈辱於公卿之序
其不遇也如此やけつていふの評判も七雄
五霸の君とせしめあつて大鼓もりの孔子は
夏後公のきつていふやきつていふ可伸も可屈も
世のの極ちりとやその中投る論語も一時
の多能くも双六もいふお自業もさういふ
尺八も上もあつたれと子貢もいふて屈辱
求達い晋人の権をあれい越王勾踐は追従
はつていふやいふもあつていふやいふ論諛
と諛諛といふやいふ里のたつていふ子西も
楚王もあつていふ賞忠誅諛の和説も荆臺
の遊のやいふと孔子もあつていふやいふ

諛諛の鑑といふやいふあつていふ高ちをいふ
秘しつてもおし秘しつてもいふやいふ
あつていふやいふ十段の諛は春秋探微の
洒落いふやいふ儒書仰神の字をいふ
あり世智と敏捷の字をいふやいふ
終るやいふ莊子にいふ太早計の人あり愚痴と
対勝のる人といふやいふ酒色といふやいふ衣食
といふやいふ仰書といふやいふ記性の人あり
今も洒落といふ大拙の人ありいふやいふ敏捷といふ
いふやいふ対勝といふやいふ対勝といふ人の信心といふ
といふやいふの洒落といふやいふ宮中といふやいふけつていふ
いふやいふの序も論語も二程の射といふやいふ

あつていふ

あつていふ

剛毅木訥の仁美にありておとるべきと慮之の
あつていふにんし程子の所傳にやれ
朱氏も敏捷よりをたれりともいふ

五倫道 程子の儒術の道者達とていふ
事と記さるるに程子の時又倫と
記さるるをいふを文とぬいひしに
又倫の名數とていふは朱氏も
記さるるに何なるに倫といふ
と辨さるるに大由の和といふに
いふるにいふに天と地と人
とをいふに天と地と人といふに

むしるもたれと天は私ありて富も
貧もあらずと程子の言に
あはれぬ五倫の道は喜怒哀楽
の道なりと程子の言に
怒りも哀もあらずと程子の言に
喜も怒りもあらずと程子の言に
次は附会の説に
人の徳をいふに
ちんありて仰子の顛倒といふ

其人喜怒哀楽の道に
程子の言に
或るものありて

とよよとれ下儒行のれ後、玉帛の信問、私家
の所屬、一有力の檀那も、詞の表裏と、
はんや、
とめ、
一粒の信、
心施、
表、
と、
善、
埃、
孔子、
致思、

ちを、
と、
ち、
と、
の、
陰、
例、
ま、
も、
陰、
の

お石とありてあしより却ゆり人の足とちもね
そはらちもさる人よむく一も熱ゆり人よ不報
の罪あり孔子の桓魋とくらへて大生徳於子
とてお撲の喧嘩の言言ふあも今日の妻に
喧やもかかす功とさるものもさるもせられとす
一も抱の筒をちりり不顯惟徳といふ仰れ
一抱と形容して草木の累とくらふ人と天上の
五妻とくらふ人の世ありて徳とほくさるも
よも今全く老ねの判とす一てあもさる向れ
方およもる人一ちらんはくむくまひんを
例一止かのきさるひりり一我もよもると十人
といふ人のあもるとさるよもよも不伐善不施
か

とて儒の顔回と徳りちると釋家の達磨
い武帝とくらへて一寺建まの我るとい
ふ一も功徳の及ぶといふものありとせ



